HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	マイノリティから汎テュルク主義のアクターへ : トルコにおけるユルックの現在
Author(s)	田村, うらら
Citation	日本中央アジア学会報, 18, 67-68
Issue Date	2022-07-31
DOI	10.14943/jacas.18.67
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91607
Type	article
File Information	JB18_016tamura.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

マイノリティから汎テュルク主義のアクターへ
――トルコにおけるユルックの現在――

田村　うらら

本報告が取り上げたのは、現代トルコ共和国において「ユルック Yörük」を自称する、テュルク系の「(元) 遊牧民」である。ユルックの原義は、トルコ国内で家畜を飼養しながら一定の周期で移動生活を営む遊牧民である。つまりユルックは、「移動性」と牧畜という「生業」を特色とした集団であり、クルド、チェルケスなどの民族的マイノリティではない。近代化前後から「粗野で遅れた」存在とみなされ差別されてきた、社会的マイノリティといえる。本報告の目的は、現代トルコにおけるユルックを事例に、社会的マイノリティが、現代的文脈における変容を経て主体性を獲得し民族のロジックを携えながら超国家的なアクターとなるその萌芽的過程を提示することにあった。

「現代トルコ共和国において、ユルックを自認する人びと[1]」の拡がりや公共的な存在感の増大が近年観察されるが、研究上ほぼ無視されている。報告では、人類学的フィールドワークをもとに、トルコでユルックが、2000年代半ば以降「伝統文化」の名の下に各地でユルック文化協会等の市民団体を組織し活動を活発化させ、一般市民の間でも存在感を高めている状況［田村 2020］を概観した。またそうした民間レベルの活動が、全国規模の祭典や会議の場などを活用し、愛国主義・オスマン朝称揚・汎テュルク主義など多様な思想を雑多に包含しながら国内外へ拡大してゆく契機となりつつあることを指摘した。

近年ユルック関係の市民団体の数は急増しており、それらは横の連帯と縦の組織化を積極的に進め、2016年には大統領府の認可を経て全国58関連団体を母体に「トルコ－テュルク世界のユルック–トルクメン連合」という名の全国組織を発足させるに至った。これらの団体名に「ユルック–トルクメン」とトルクメンを併記することが、近年の傾向である。前述の連盟副会長の説明によれば、「中央アジアからアナトリアに移入したテュルク系遊牧民のうち、先に移入して平野に定住したのがトルクメン、後から来て山間部で遊牧を続けたのがユルック」というおおよその認識はあるものの、専門家との議論の末、明確な線引きは困難と判断し、ユルック文化復興活動にトルクメンを包含することになった、という。同時に諸団

(1) 報告では、これを「ユルック」の定義とした。

体が多用する「オグズ24支族（Türk）の系図」は、一般トルコ人向けには、「オグズ24支族＝テュルクは、ユルックとトルクメン混成体からなる」とのメッセージとして流通している。

これらの諸団体は、文化祭典という広く市民を巻き込むイベントを主催したり、会議・シンポジウムなどを開催して現状把握・課題認識の共有と目標設定を行なっている。たとえば2016年2月に開催された第1回ユルック－トルクメンワークショップおよび研究会議[2]には、国内外から104団体の参加があり、そのうち8つは北キプロス・コソボ・シリア・アゼルバイジャン・クリミアなどのテュルク系人口を擁する周辺諸外国地域名等を冠した団体であった。会議の結語宣言では、中央アジアからアナトリアまでのイスラームテュルク世界の強い連帯の必要性が強調され、上記諸外国地域での情勢の注視やユルック－トルクメン文化の研究・正しい周知・中央アジアのテュルク系諸国の学術研究拠点の整備などを含む目標が設定された。また他方で、市民を巻き込む夏季の文化祭典は、ユルック文化を対象化し、混交状態のまま多様な娯楽を一般市民に提供する場となっている。会場にブースを構え様々なパフォーマンスを行なう諸団体には、ユルックを祖とする村落文化団体からキルクーク・トルクメンなどの周辺諸国の団体、果てはトゥラン主義団体まであり実に雑多である。その参加者は、そこに集まるすべてを「我々テュルクの伝統文化」として楽しみ慈しんでいるのである。そこではユルックの後進性が払拭されるばかりか、トルクメン、オスマン朝、トルコ共和国など様々な要素を雑多に包含しながら示される「誇るべき我々テュルクの伝統文化」の土台として認識されていた。

これら諸団体の理念・祭典と会議の分析から、「ユルック－トルクメン」という連名併記の二つの作用が浮かび上がってくると報告者は考えた。すなわち国内的には、より多くの「過去には遊牧民で、トルクメンであっただろう」と感じる市民を包含してゆく求心力として作用する。また対外的には、同じトルクメン（トゥルクマーン）あるいはテュルク系民族として、周辺国のテュルク系民族的マイノリティに連帯を示す遠心力として作用する。つまり「テュルク」という語のもつ二重性[3]とも相俟って、「ユルック」という生業集団カテゴリと「トルクメン」という民族カテゴリの結合体は、文脈依存的に柔軟な読み替えが可能なカテゴリに変化しているのである。

参考文献

田村うらら 2020「公共化するユルック――トルコにおける「遊牧民」の連帯をめぐって」『地域研究』20（1）、56－78頁。

Yörükler Kültür Dayanışma ve Yardımlaşma Derneği. 2016. *Türkiye 1. Yörük Türkmen Çalıştayı ve Arama Konferansı Bildiri Kitabı ve Sonuç Raporu*. Antalya.

（金沢大学人間社会研究域）

[2] 以下会議についての記述は、Yörükler Kültür Dayanışma ve Yardımlaşma Derneği（2016）に基づく。

[3] Turk（Türk）は、トルコ人（国民）とテュルク系民族の２つの意味を有する。